



いざ生きめやも

夏の講習の時にちょっとだけ触れたのだが、宮崎駿の『風立ちぬ』は、二人の人物に捧げられたオマージュである。一人は零戦の設計者である堀越二郎、もう一人は、小説『風立ちぬ』の作者である堀辰雄である。

小説『風立ちぬ』は、Wikipediaをそのまま引用すると、

「作者本人の体験をもとに執筆された堀辰雄の代表的作品である。「序曲」「春」「風立ちぬ」「冬」「死のかげの谷」の5章から成る。美しい自然に囲まれた高原の風景の中で、重い病（結核）に冒されている婚約者に付き添う「私」が彼女の死の影におびえながらも、2人で残された時間を支え合いながら共に生きる物語。風のように去ってゆく時の流れの裡に人間の実体を捉え、生きることよりは死ぬことの意味を問うと同時に、死を越えて生きることの意味をも問い、時間を超越した生の意味と幸福感が確立してゆく過程を描いた作品である。」

とある。この作品の中にある「風立ちぬ、いざ生きめやも。」という有名な詩句は、作品冒頭に掲げられているポール・ヴァレリーの詩『海辺の墓地』の一節、

“Le vent se lève, il faut tenter de vivre”

を、堀辰雄が訳したものであるが、この詩句についてもWikipedeia を引用すると、

「『風立ちぬ』の「ぬ」は過去・完了の助動詞で、「風が立った」の意である。「いざ生きめやも」の「め・やも」は、未来推量・意志の助動詞の「む」の已然形「め」と、反語の「やも」を繋げた「生きようか、いやそんなことはない」の意であるが、「いざ」は、「さ

あ」という意の強い語感で「め」に係り、「生きようじゃないか」という意が同時に含まれている。ヴァレリーの詩の直訳である「生きることを試みなければならない」という意志的なものと、その後に襲ってくる不安な状況を予覚したものが一体となっている。また、過去から吹いてきた風が今ここに到達し起きたという時間的・空間的広がりを表し、生きようとする覚悟と不安がうまれた瞬間をとらえている。」

と、なかなかカッコイイ解説がされているのだが、古典文法的には、やはり「生きめやも」に「生きようじゃないか」の解釈は厳しいと思われる。例えば、次のような発言もある。

丸谷 「生きめやも」というのは、生きようか、いや、断じて生きない、死のうということになるわけですね。（中略）つまりこれは結果的には誤訳なんです。「やも」の用法を堀は知らなかったんでしょう。

大野 こういう訳をするようでは堀さんは日本語の古典語の力はあまりなかったと思います。（『日本語で一番大事なもの』中央公論、1987）

丸谷才一さん（作家）と大野晋先生（国語学者）は日本語に関する第一人者である。そのお二人にこう認定されてしまっただけで、さすがの堀辰雄も立つ瀬がない感じだが、一方で堀辰雄は万葉集にかなり精通しており、こう簡単に断じるわけにはいかない気もする。

いづれにしろ、有名な「風立ちぬ、いざ生きめやも。」にまつわる話に結論は出ない。

ただし、「我恋ひめやも」の解釈は確定しているのでお間違いなく（笑）。